

## 留学生同窓会の活動、その役割と方向性について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-03-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中島, 清 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10098/3077">http://hdl.handle.net/10098/3077</a>

## 留学生同窓会の活動、その役割と方向性について

中島 清

### 要旨

本稿では、福井大学留学生同窓会の設立準備段階から世界 12 支部体制が整う現在までの約 10 年間の活動を記録・評価しつつ、同窓会の意義、活動の種類、問題点を明らかにしながら、今後の展開の方向性を考察する。同時に、本学との共同事業を展開するまでに成長した上海支部の活動モデルの更なる発展と、そのモデルの全支部網での展開の可能性を考察する。

キーワード：帰国留学生、同窓会、意義、基盤、活動

### 1. はじめに

「同窓会」の語義としては、「同じ学校の出身者によって組織されている団体」及び「その団体の会合」を意味するが、一般的には「会合」の方が想起される。それは、その会合こそが同窓会という団体の主たる活動であるためであろう。ただ、「同窓会」が会合だけにとどまらず、その他の活動にも発展・展開するためには、団体としての「同窓会」の組織化が必要になってくる。

福井大学留学生センターでは、帰国留学生を組織化し、各種活動を展開するために、文部科学省より特別配分予算を受け、中国、ブラジル、ベトナム、バングラデシュ、マレーシア、韓国、ドイツ、インドネシア、台湾の 9 ヶ国 13 名の帰国留学生を福井に招聘し、平成 15 年 11 月 30 日に「第 1 回福井大学留学生同窓会大会」を開催した。大会には、招聘した帰国留学生 13 名及び在学留学生等計 91 名が出席し、「福井大学留学生同窓会設立宣言文」を採択した。こうして、「福井大学留学生同窓会」が正式に発足した。

そして、その後、平成 16 年 12 月のマレーシア支部設立を皮切りに、タイ、インドネシア、韓国、西安、上海、杭州、台湾、北京、ハンブルク、日本、及びバングラデシュに支部が設立された。現在 12 の支部網が整い、活動を展開している。

私は平成 12 年 8 月に本学に着任して以来、同窓会設立を目指し、基盤整備、設立大会、年次会合、シンポジウムなどを通して、各種活動を担当してきた。そして、平成 20 年度には同窓会との共同事業である「スプリングプログラム in 上海」が開始され、その後毎年実施されている。

本稿では、同窓会設立準備段階から「スプリングプログラム in 上海」までの、この約 10 年の活動の軌跡をたどり、考察し、記録を残し、今後の同窓会活動の糧としたい。

### 2. 福井大学留学生同窓会の設立意義

本論に入る前に、同窓会設立の意義について考察してみたい。

日本で学んだ帰国留学生で作る同窓会組織は世界中に数百団体を数えると思われる。ASCOJA(元

日本留学生アセアン評議会)のような横断組織も多い。しかし、まず大学単位の留学生同窓会母体が設立され、その後、その傘下に各国支部が組織される展開は珍しいのではないのかというのが「福井大学留学生同窓会」設立の最初の着想であった。

例えば、タイ国にはタイ国元留学生協会(OJAST)があり、アジア地域の元留学生会の中で最も長い歴史を有し、タイ人の間でも「ソーノーヨー」の名で親しまれている。3,000人近い会員を抱え、その附属日本語学校では毎年数千の老若男女が日本語を学ぶ。そんなタイ国に、福井大学で学んだ帰国留学生の数は20名に届かない。OJASTの中でのその存在はあまりにも小さい。

「福井大学留学生同窓会」が設立されない限り、日本、そして福井との接点は自然消滅する運命にある。日本及び福井との接点を維持し、「顔みえる」交流、心と心の交流を持続させるには福井大学をベースとした同窓会が設立され、自国同窓生だけでなく世界中の同窓生とつながっているという感覚を育てていくしかない。

福井大学の留学生は、福井で学び、生活し、交わり、思い出を作り、帰った。福井という土地、人に限りない愛着を持っている。それこそが共通の遺産である。他方、福井という地域社会、更には福井大学が国際化し、国際的に通用する人材育成を図るには、福井に学び、福井を知り、福井に愛着を持つ在学留学生及び帰国留学生のネットワークや組織、特に福井大学留学生同窓会に支援を求め、相互支援交流活動を展開していくしかないのである。つまり、同窓会の意義、役割はあまりにも大きいと言える。

### 3. 同窓会発足及び活動の基盤となるもの

それでは、同窓会はどのような状況で発足し、活動を継続できるのか、その基盤について、考察したい。

#### 1) 帰国留学生の存在、その数と分散状況

同窓会の設立には当然ながら、卒業同窓生の存在が前提となる。福井大学では昭和45年(1970年)にマレーシアのリム・キム・テック氏が第1号外国人留学生として工学部繊維染染料学科に入学して以来、平成22年度(2010年)までの40年間に約1,400名の留学生を受け入れている。内、現在250名の留学生が在学中で、150名が日本国内の企業に就職して日本に滞在している。そして、母国に帰っている留学生の数は約70カ国1,000名になる。

従来、同窓会支部の設立を促す基本的な帰国留学生数の目安を10名としてきたが、その根拠は特にない。本学のように帰国留学生の絶対数が少ない大学と、大規模大学の場合ではその基本数に差が生まれるのは当然かもしれない。現在の12支部網はすべて10名以上の留学生が存在する国・地域に設立されている。中国においては、80名近い帰国留学生がいる上海地区をはじめ、北京、西安、杭州それぞれの地区には40名以上の帰国留学生が活躍している。

今後は平成23年度に予定しているミャンマー支部設立に続き、ブラジル、米国、フィリピンなどが順次対象となるであろう。ベトナムの場合は南ベトナム政府が崩壊する1975年時点ですでに8名の留学生がいたが、当時の留学生たちは米国等で生活するものが多いため、米国同窓会等に合流することになるであろう。

尚、帰国留学生が少なく同窓会設立に及ばないような国の場合には、マスコミ特派員のような役割の連絡調整員を置くことにより、ネットワークの充実を図ることも考えられる。

## 2) 各個人情報 の把握

同窓会設立には帰国留学生の住所、電話番号、e-mail アドレスなどの個人情報の把握が欠かせない。現在帰国留学生の住所と e-mail アドレスをほぼ把握している。

10 年前、前任者退職 5 か月後に着任した。引き継いだ研究室には書籍、書類、資料が全く残っておらず、活動の痕跡もなく、途方に暮れた。幸いにも事務局が作成した「帰国外国人留学生及現員外国人留学生名簿」(2000 年 2 月 1 日)を留学生係の職員から入手できた。氏名、所属学部、卒業年度、住所という簡単なものであったが、この名簿がなかったなら、同窓会設立は難しかったと認識している。

早速、留学生に協力してもらって、名簿の情報をエクセルに入力し、住所ラベルに打ち出せるようにした。平成 13 年(2001 年)11 月にネットワーク誌「こころねっと」第 1 号(2,000 部)発刊と同時にそれを帰国留学生全員に送付し、冊子に「同窓会登録用紙」を同封して、同窓会登録を呼びかけた。そして、その作業を毎年継続し、情報を蓄積・更新している。

その結果、新規の同窓会支部設立大会、年次大会など各種活動情報の配信は現在 e-mail 網で発信できるようになっている。

尚、個人情報保護の観点から、「帰国外国人留学生及現員外国人留学生名簿」は 2002 年以降印刷されていない。

## 3) 熱意あるリーダーの存在

同窓会支部が組織化された後に活動が活発に展開されるかどうかは、偏に、会長、事務局長などその事務局役員の熱意、技量にかかっている。最も活発な上海支部の場合は事務局長于平氏の積極的な企画・運営により、毎年の年次総会、交流ミッションの福井派遣、「スプリングプログラム in 上海」、上海福井県人会との交流、等々各種行事を実施している。同様に、西安支部、マレーシア支部、ハンブルク支部、インドネシア支部、台湾支部、日本支部なども盛んに行事を展開しているが、休眠状態になっている支部もある。

## 4) 存在意義の認識

その国の経済発展状況やその国における同窓生の社会的位置も、同窓会が活発になるかどうかのバロメーターとなる。ある国が経済的発展途上にあり、日本からの支援や技術導入を目指しているのであれば、その国では日本とのつながりがより有利なものと認識されるので、日本との関係、更には福井大学との関係を維持強化したいという力学が働く。また、帰国留学生が自国社会の上層部に属し、現地社会に貢献できる立場にあれば、同窓生を組織し、社会貢献活動を展開することができる。自己の存在価値をより強く意識できるのである。

経済産業省傘下のある機関には十万人以上の帰国研修生がいて、43 カ国に 70 の同窓会が組織され、強力なネットワークがあるが、開発途上国ほど活発で、日本語クラス、人材育成の研修・セミナー、文化講演会、機関誌発行など幅広い活動を展開しているところもあり、中には、千平米の事務所と 10 名以上の職員を抱えるところがある。他方、先進国仲間入り直前の国の同窓会に

は休眠状態に近いものがある。特記すべきは半分以上の同窓会が日本語クラスを運営していることである。ただ、産業界の幹部社員集団だからできるということもあり、大学の同窓会とは一概に比較できない。

産業界や教育界など多種多様な人材からなる福井大学留学生同窓会も、その構成員の特性を生かし、その国の状況に応じて、各種活動を展開できると思われる。

#### 5) 財務基盤

本学の留学生同窓会 12 支部で年会費を徴収している支部はないと理解している。年次総会等には会食を伴うがその都度参加費を徴収している。また、上海支部 (16 名、平成 19 年)、西安支部 (7 名、平成 20 年) が交流ミッションを編成・来訪し、それぞれ 5 日間、福井の産官学民と交流したが、その際は福井到着までの経費全額を支部側 (参加者) が負担し、到着後の経費は JASSO や中島平和記念財団などから一部助成を受けた。

年次総会やファミリーデーなどだけでなく、何かの事業を実施するとしたら、年次会費を設ける必要があるだろう。ただ、それは各支部が決めることである。

#### 6) 規約と事務局役員

同窓会を組織化し活動を展開するためには、同窓会規約を作成し、事務局役員の選出方法、任期等も規定すべきかと思われる。しかし、現在同窓会支部規定を作成しているところはないし、上部団体である福井大学留学生同窓会にもその規定はない。あるのは、設立宣言文だけである。

他方、同窓会支部の事務局役員の改選については、2010 年 9 月に実施したマレーシア支部が初めてのケースである。設立 6 年目の改選である。ただ、役員改選は規定しづらい面もある。つまり、たかが大学の同窓会支部とはいってもその役職を社会的に利用しようとする動きの可能性も否定できない。会長職そのものが得られたら、その後は活動に興味を示さないというものである。また、上海支部のように積極的に活動を展開する熱意、能力に溢れる事務局役員がいる場合には、弊害が表れない限り継続をよしとすべきかと思われる。

#### 7) 福井大学担当者の役割

世界に展開する 12 支部、そして 12 支部にカバーされない多数の同窓生と、日々のコミュニケーションを維持し、同窓会活動を展開するには福井大学留学生センターの担当者の役割も大きい。福井大学では住所リスト、e-mail リストを国、地域等各種ジャンル毎にグループ分けし、年賀の挨拶、災害時の安否など、全員に一斉配信してコミュニケーションを維持している。住所や e-mail アドレスの変更も日々登録更新している。

福井大学を卒業したというだけで、同窓会活動に参加するものではない。在学中にどれほどの思い出を作り、福井への愛着を育てられるかは、教職員一人一人の姿勢や地域社会との交流、同じ時期に過ごした留学生仲間との交流の深さが影響する。その意味で、留学生センターの担当者は、留学生の在学中から各種活動を通して各層との良好な関係の構築に努めなければならない。幸いにも福井大学には福井大学留学生会があり、「国際交流ラウンジ」「ビデオショウ」「サマーキャンプ」「スキー旅行」、歓送迎会、そして毎週末のスポーツ大会など、毎年 80 件から 90 件に及ぶ学内交流活動を実施している。また、留学生センターを通して、小中学校の国際理解教育等へ毎

年 60 件ほど留学生を一日講師として派遣している。

#### 4. 活動の位相

さて、これまでの具体的な活動に基づき、活動の類型化を試みたい。

##### 1) 二人、数人、そして年次会合

グローバル化した IT 社会の現代では、本学で同時期に学んだ留学生たちは帰国後も相互に連絡を取り合って旧交を温め、情報交換をしている。二人、そして数人でお酒を酌み交わすこともある。そんな中、「中国の張さん」から「1995 年ごろ工学部を卒業したインドネシアのアリさんの連絡先を教えてください」というメールが入る。すぐ、「アリさん」に「張さん」からのメッセージを伝えることにしている。そのような役割は、現地国内であれば同窓会支部事務局が、国際間であれば留学生センター担当者が担う。他方、同時期の留学ではない、新旧の同窓生を地域的に結びつける役割を果たすのが同窓会支部の年次会合である。その会合には要請があれば、本学の教職員が参加するようにしている。

新規の支部設立大会の会合については、その会議費を留学生センターが負担することになっているが、それ以降の年次総会等の会合は参加者負担でお願いしている。

##### 2) 母国地域社会への貢献活動

留学生の受け入れ目的には途上国人材育成、知日派育成などを図る側面があり、帰国留学生にも母国の地域社会に波及効果を及ぼす役割が期待されている。UAE やブラジルなどでは帰国留学生が、地域社会、大学、小学校等で日本紹介、福井大学紹介などのセミナーや展示会を開催している。また、モロッコ、ミャンマーでは語学講座を開設している。このような場合には、本学教職員や自治体に呼び掛けて、ポスター、小物、資料、教材などを送付し支援している。

平成 16 年のスマトラ沖津波発生時には福井大学留学生会が県内で 100 万円の募金を集めると同時に、インドネシア支部の要請に基づき、本学教員を派遣し、現地の高校理科教員を対象に Syiah Kuala 大学と共催で「物理教育ワークショップ（身の回りの材料を用いる効果的な物理実験法）」を実施し、教育復興の援助を試みた。

上海支部では役員たちが上海福井県人会に入会し、福井県企業と現地社会の橋渡し役として機能している。そして、上海支部が主催する年次総会等各種活動には福井県関係者にも参加してもらっている。

##### 3) 福井地域社会との連携活動

前述の通り、福井という地域社会の国際化を支援するためには、帰国留学生のネットワーク、特に福井大学留学生同窓会各支部に支援を求め、相互支援交流活動を推進していくのが強力な方法であると認識している。

###### ① 同窓会支部が編成する交流ミッションの来訪

平成 19 年には上海支部編成の「教育交流と経済交流ミッション」（10 月 1 日～5 日、16 名）が来訪し、「～福井大学留学生同窓会上海支部と福井県産官学民との交流ネットワーク構築に向けて～」をテーマにシンポジウム（107 名参加）を実施した。そして、福井県国際・マーケッ

ト戦略課との意見交換会、福井県内企業との商談会（福井商工会議所）、工場見学会、教職員学生との交流会も実施した。また、同様に平成20年には西安支部編成の「母校訪問及び観光交流ミッション」（10月24日～28日、7名）が来訪し、若狭町観光振興のためのモニターツアーに参加し、シンポジウムやアンケートに協力するとともに、教職員学生との交流会を実施した。

## ② 福井県産業界等が編成するミッションへの協力

2005年の福井県食品業界ミッションの訪中、2009年度の福井県観光誘致ミッションの訪中では、西安支部が受け入れ窓口となり、意見交換会などでアドバイスをしてもらった。

また、2010年の福井県AALA（日本アジア・アフリカ・ラテンアメリカ連帯委員会）ミッション23名のマレーシア訪問においては、ミッション団が元首相Dr. マハティールと懇談する前に、マレーシア支部事務局役員5名及び家族3名計8名と会食して意見交換・交流会を実施した。今後も双方向でミッションの交流を図りたい。

## ③ 各種アンケートへの協力

平成21年7月に福井県観光事業推進のための基礎調査「海外観光客誘致のための福井県の観光地等に関するアンケート調査」への協力依頼を福井県観光営業部国際・マーケット戦略課より受け、e-mail配信により、帰国留学生54名、在学学生66名計110名から回答を得た。同様に、県内小中学校の文化祭行事等における外国人の意識調査アンケート等には在学留学生だけでなく、帰国留学生にも常に回答協力を求めている。そのような活動を通して、帰国留学生に福井との結びつきを再認識してもらえるのである。

## ④ 国際的ビジネスの橋渡し

福井県産業界の国際化支援として、過去10年間に65名の県内企業就職など、卒業留学生の県内就職を推進しているところであるが、具体的なビジネスの橋渡しも行っている。最近の例では、福井県内企業より「ソフトウェア開発をしてくれる優秀な会社、個人を紹介していただきたい」という話があり、全同窓会支部に連絡したところ、ソフトウェア会社を経営する上海支部会員が興味を示し、実際に取引が進んでいる。海外に進出したいが、進出する前に現地の様子を知りたいという話があった場合には、当該地区同窓会支部の事務局長に繋ぐようにしている。このような依頼案件は中国、ベトナム、インドネシアなどであった。

## 4) 福井大学の国際化を支援する活動

本学の活動を海外にPRしつつ、優秀な留学生を確保する、また、海外の研究者との共同研究を進める、海外で共同事業を展開する、等々のためには、海外の有力大学と学術交流協定を締結するとともに、海外事務所網の構築が効果的な手段となる。

本学では海外大学約70校と学術交流協定を締結しているが、地方の小規模大学として、海外に独自の事務所を展開するにはその人的財的資源の限界を超えている。そこで、同窓会にその海外事務所としての役割を担ってもらっている。

同窓会支部との相互支援活動はすでに述べたところであるが、本学の在学学生を直接支援する活動も生まれてきたので、その一例を紹介したい。

### ① 大学院工学研究科 PBL (Project-Based Learning) 学生の台湾訪問支援

2010年10月本学大学院工学研究科応用生物化学専攻沖昌也准教授の指導のもとに、日本人学生5名と中国人留学生4名計10名が3泊4日で台湾に渡り、企業3社（現地、日系、合弁各1社）、大学1校を訪問した。その目的は「日本の企業及び大学における他国籍人の重要性に関する調査」であった。訪問先設定や現地での活動支援を台湾支部に求めたところ、劉維和副会長（現地企業社長）が自社訪問を受け入れるとともに、移動バスを無料手配し、高級ゴルフ場での昼食を提供するなど、全面的にサポートしてくれた。本学学生たちは先輩の活躍ぶりに感銘を受けると同時に、その溢れる母校愛に感動した。

## 5. 同窓会支部との共同事業「スプリングプログラム in 上海」の意味するもの

本事業は本学日本人学生の国際性涵養をはかるために、大学院入学前導入教育として、平成20年度以降毎年実施していて、今後も継続実施の予定である。このプログラムの大きな特徴は、上海理工大学（学術交流協定締結大学）、福井大学留学生同窓会上海支部、福井県（特にその上海事務所）、及び現地進出福井県企業、4者との共同事業であるということである。産官学民を巻き込みながら、大学の国際交流事業（国際的に通用する人材育成事業）を展開するものであり、その実施における留学生同窓会上海支部の果たす役割は大変大きい。留学生センターとしては同窓会活動のモデル事業と位置付けている。

### ① プログラム概要（平成21年度の例）

講座開設期間	平成22年3月7日から21日まで2週間
講座開設場所	上海理工大学（中国上海市）
宿泊先	上海理工大学ゲストハウス（海外受入れ研究者用宿泊施設）
参加者	福井大学工学部4年生12名
内容	1週目 「中国語・文化」「短期留学工学特別講義」 2週目 「海外企業経営・技術論」及び「海外インターンシップ」
講師	1週目 上海理工大学教員 2週目 福井大学留学生同窓会上海支部会員（会社経営者） 福井県上海事務所長、現地進出福井県企業経営者
共同事業者	福井大学、上海理工大学、福井県、上海進出福井県企業 福井大学留学生同窓会上海支部

### ② 上海支部の役割

2週目午前は「海外企業経営・技術論」の講義を毎朝2コマ実施するが、内1コマは上海支部会員である会社経営者が担当している。上海地区に80名近い帰国留学生がいるが、約20名が企業家又は総経理として活躍しているので、彼らの卒業後から現在の地位に至るまでの過程、そして、国際経済都市上海での企業経営全般について、技術面も含めて話してもらっている。また、午後は同窓会支部会員が経営する会社を中心に工場見学を行い、現場の動きを体験してもらっている。本プログラムの最終日にはプログラム関係者への感謝を込めて、上海理工大学

の食堂で交流会を実施しているが、福井大学留学生同窓会上海支部会員も毎年15名ぐらいが合流している。

### ③ 福井大学留学生センターの役割

本事業の構想・企画段階から留学生センターが大きく関与し、工学研究科と連携して実施している。第1週目は工学研究科が担当しているが、第2週目は留学生センターが全面的に担当し、期間中を通して留学生センター教員が出張し、授業を運営、単位認定・評価をしている。本プログラムでの履修科目は「工学研究科共通科目」として単位認定されるのである。

## 6. 今後の方向性

従来展開してきた諸活動をそのまま継続拡大していくとともに、今後は活動の連携軸の多様化を図る必要がある。つまり、これまでは同窓会支部が位置する地域社会内での活動、同窓会支部と福井地域社会との連携活動、この二つの軸が中心であったが、今後は同窓会各支部同士が相互にミッション訪問を受け入れる等、横軸の連携を促進することが期待される。福井大学留学生同窓会12支部の各支部、それぞれの地域社会、福井大学、福井地域社会が多方向の連携活動を展開してこそ、同窓会活動の躍動する波及効果が実現できるのである。

そのためには、世界12支部代表、同窓会支部未組織地区の代表、福井県産官学民の代表からなる福井大学留学生同窓会大会及びシンポジウムの開催が必須であり、今後の方向性はその成果如何にかかっている。

Activities of Alumni Society, its Mission and Direction in the Future

NAKASHIMA Kiyoshi

Keywords: former international students, alumni society, mission, basis, activities

This study observes and evaluates the past ten year activities of the University of Fukui Alumni Society, from its inception and establishing process through its present network of twelve branches around the globe. It also tries to identify its mission, patterns of activities, and future direction. It shall be led to further development of various activities among all twelve branches, based upon the prototype activities initiated by Shanghai Branch especially through its recent joint programs with University of Fukui.